

2023 06

弱さの光

5月の終わりから、随分沢山の夢を見た。あれは夢だったのか、「映画」だったのか、それとも私の記憶の断片だったのか...

実は、5月の終わりに入院、手術をしてました。「がん」でした。何とか手術を終え、ようやく退院したところです。

その手術後数日、モーレツに眠り、そして夢のようなものを、浴びるほど観たんだ。あれは一体何だったんだらう...。まさしく、カオスという感じで、そのほとんど全てをキレイサッパリ忘れちゃったけど。

おかげさまで手術はうまく行きました。本当は、とんでもない弱虫なので、入院前には目一杯怯えてましたが、目を瞑って、手術という関門を走り抜ける気持ちでやり過ごしました。医療、看護スタッフの手厚いケアがあつてのことですが...

「ああ大変だった」というのが本音です。

ベッドに横たわりながら、撮影させてもらった『風のかたち』という小児がんの子どもたちの記録で、一人ひとりが私如きの「大変さ」を超える闘病の体験を生き、カメラの前で堂々と語ってくれたこと...。それでも、生きることが叶わず、旅立ってしまった子どもたちも居たことを思わないわけにはいかなかった。

「いのち」とは、生きて在ることだけと言うわけでは無い...という大切なことを教えてくれた。

病気の子どもたち、障がいのある「奈緒ちゃん」や「えんとこ」の遠藤滋、認知症の方々、にカメラを向けながら、随分色々なことを教えてもらってきたつもりでいたけど、本当のところ、どれほどのことが身に染みたとと言えるだろう...

映画を観てくれた方々から「伊勢さんの眼差しは“やさしい”ですね」と言われることがあり、その度に「そんなことはない...」と思う。

もしも、“やさしい”と感じさせる何かを映画に写っているとすれば、それは写っている人そのもの、病気や障がいのある一人ひとりの「弱さの光」のようなものが記憶に残るからだ...。かすかな光の方が、マバユイ光よりも、はるかに心に届くんだ。

《子どもたちはみな「神はまだ人間に失望していない」というメッセージを神様からもらい、この世に生まれてきた。》

と、インドの詩人、タゴールは言ったらしい。

「子どもたち」同様に「病者」や「障がい者」は、希望のメッセージを体現する存在のような気もする。

その存在の、かすかな弱い光を受け止め、橋渡しするナリワイを、もう少し気合を入れ直してやらなければ。むしろ、病を経て、よりそう思うようになった...

まだまだ、だ。

私が、映画のお客さんの入りを気にして、「人氣がないからなあ...」と呟くと、「そんなことはない、伊勢さんの映画は宇宙では大変な人氣ですよ...」と励ましてくれる人がいた。「弱さの光」は、きつと遠くまで届く光なのだ。遠い遠い宇宙の果てまでか、10年も100年も1000年も先なのか...

術後に体験した不思議なカオスの世界は、映画が時空を越えて「弱さの光」の旅をしているサマを垣間見せてくれたのかもしれない。私の「銀河鉄道の旅」、「いのち」の奥行きのようなものかな...

《みんなにデクノボウと呼ばれ

褒められもせず 苦にもされず 》(宮沢賢治)

そおいう人に私“も”なりたい。

もうちょい生きて、
もうちょい映画を創ろう！！

伊勢 真一